

修士 (2021 年度)

エスニック・マイノリティの若者の家族関係 ——フィリピン系ニューカマー第二世代の親子関係を中心に——

益子 亜明

1. 問題意識

本研究では、家族関係を社会階層や家族構造のありようから検討することを通じて、離学したエスニック・マイノリティの若者の生を構造的に捉えることを目的とし、日本に住む離学したフィリピン系ニューカマー第二世代へのインタビュー調査を行った。

日本の移民研究では、ニューカマーの増加や定住に伴い、第一世代の子どもを対象とする教育学的な研究が蓄積されてきた。しかし近年、フィリピン系をはじめとするかれらが離学し労働市場に参入する趨勢を見せるなかで、従来の視座がかれらの離学後に焦点化し、直面する不平等・困難の構造や多層的な生のありようを十分に捉えてきたとはいえない。したがって、より構造的な視座のもと、離学した第二世代を捉えることが求められている。

その視座として「家族」を提示した本研究は、第二世代の親子を中心とした家族関係を社会構造との関連から検討し、離学後のかれらにとって「家族」がいかに「生きる基盤」(牟田 2009)であるか否かという点に問題意識を向けている。

2. 先行研究と問題設定

家族社会学において家族の多様化や個人化は、画一的な社会階層や家族構造を前提に個人の選択が拡大する肯定的な変化として捉えられ(稲葉 2012; 岩間 2017)、ライフコース論における親-成人未婚子関係に関する一連の研究も同様の傾向が見受けられる。したがって、家族関係の選択可能性や家族の変動を社会経済的背景と関連させ、近年増加する家族が資源たりえない層に焦点化し検討することが求められている(岩間 2017; 渡辺 2017)。

こうした非画一的な社会階層や家族構造を背景に家族関係を検討する視座は、世代間で階層や貧困が再生産される構造化されたプロセスに目を向けることに結びつく。

そして対象者の階層状況をめぐり、移民研究における「編入様式論」にもとづき、第一世代のフィリピン人女性が経験した社会制度的構造によって規定された来日・定住のプロセスと、それを背景とした第二世代の教育達成を通じた職業達成の様相を考察した。

したがって本研究は、画一的でない社会階層や家族構造のありようを背景に、階層・貧困の世代的再生産のプロセスに着目しながら、以下の2つの問いを設定した。すなわち、

(1) 親と子の階層状況、子が育った家族構造が離学後の親子やフィリピンに住む家族との関係性にどのような影響を与えているか、(2) その家族関係が離学後の第二世代のライフコースや生にどのような意味や機能をもっているか、である。

3. 調査結果と考察

本研究は、第二世代が結ぶ親子やフィリピンに住む家族との関係性を、経済的・非経済的援助や家族規範、家族との同別居形態を中心とした諸側面から捉え、「連帯」や「対立」、相反する意識や行為が内在する状態を示す「アンビバレンス」の様相を考察した。5名の

フィリピン／日本生まれの20代未婚男性を対象に、半構造化インタビュー調査を行った。フィリピン生まれの対象者は中学校年齢までに来日している。母親は全員フィリピン出身、父親はフィリピンとインド出身を含み、対象者のうち4名が親の離婚や再婚を経験している。対象者の学歴は高校卒と大学・院卒で、現在の就労状況は起業や非正規雇用である。

まず、子への親による経済的援助の要求や、子から親への援助実践が見られた。その背景には親の不安定な経済状況が見られるが、階層・貧困の世代的再生産を伴う子の早期の離学と経済的自立は「家族を助けたい」という意識を醸成し、稼ぎ手として定位家族の経済関係に留めると同時に、フィリピンに住む家族への援助展望に結びつく。この意識は子のアイデンティティを保証し、働くことに意味を付与していると見受けられる。他方で、早期の離学と経済的自立はフィリピンでの進学を選択させ、親への援助を回避するが、フィリピンの家族とのつながりを維持・強化し、かれらを経済的に援助する様相も見られた。

次に、経済的援助の様相を踏まえ、子がつまづき規範をめぐる選択可能性は親や子の階層状況によって左右されることが示された。これまで日本のフィリピン系ニューカマー第二世代に関する研究では、「家族中心主義」的規範を含む「文化」によって関係性を説明する傾向が見られたが、階層の視点から捉え直す必要性が示唆された。

そして親元同居には、親の経済状況が比較的安定している対象者と、家計を援助する稼ぎ手役割を担う対象者が含まれている。また別居は、階層・貧困の世代的再生産や親子間での葛藤が早期の経済的自立や離家を促す状況によってもたらされている。

4. 結論

第1の問いについて、子がつまづき家族関係をめぐる選択可能性は、階層・貧困の世代的再生産プロセスによって構造化、左右されている。つまり、家族の多様化や個人化を画一的でない社会階層や家族構造、またマイノリティの視点から捉え直す必要性を示している。そして、これは従来の議論が前提とした、自律した「個人」像を問い直すと考えられる。

第2の問いについて、離学した子にとって家族関係は階層状況を背景に、生活基盤となりうるか否かが規定され、またとりわけ不安定な階層状況にあることで子のアイデンティティを保証する。近代化の進展に伴い、近代家族が担ってきた「生活基盤の保障」と「アイデンティティ供給」の機能が果たされなくなる「家族のリスク化」が指摘されるが（山田2013）、本研究は社会階層や家族構造が「生きる基盤」としての家族のあり方を左右することを明らかにし、現代において問われている家族のオルタナティブをめぐる議論に結びつく。

参考文献

- 稲葉昭英,2012,「家族の変動と社会階層移動」『三田社会学』17: 28-42.
- 岩間暁子,2017,「社会階層論と家族社会学」藤崎宏子・池岡義孝編『現代日本の家族社会学を問う——多様化のなかの対話』ミネルヴァ書房,85-106.
- 牟田和恵,2009,「家族のオルタナティブと新たな生の基盤を求めて——本書のねらい」牟田和恵編『家族を超える社会学——新たな生の基盤を求めて』新曜社,i-vi.
- 渡辺秀樹,2017,「家族研究の継承と課題 [1] ——家族の多様性への多様な接近」藤崎宏子・池岡義孝編『現代日本の家族社会学を問う——多様化のなかの対話』ミネルヴァ書房,239-251.
- 山田昌弘,2013,「家族のリスク化」今田高俊編『社会生活からみたリスク』岩波書店,13-36.